２０２５年春 EAA 北京研修

石川禎子
The University of Tokyo

EAA 研修で初めて訪れた場所は北京大学だった。２０２２年の１２月ぶりに北京大学に足を踏み入れたことになるか。実は私は２０２２年のＡセメスターに、北京大学の元培学院に留学していたのだ。

留学中に学んだ教育棟、友人たちと食卓を囲んだ食堂棟、よく気分転換に散策した未名湖など、懐かしい風景が目に入り、気分がついつい高揚してしまう。だが、中国がゼロコロナ政策を敷いた期間の留学と、コロナ禍後の今回、北京大学の先生や生徒に案内されてのキャンパス散策では、「視点」があまりにも異なり、私としては、まるで旧友の新しい一面を見たような驚きに満ち溢れた体験をした。

北京大学入構後、まず俄文楼へ案内された。この棟の１階には元培学院を担当している輔導員のオフィスがあり、留学中は事務手続きのために数回訪れた。何をしに俄文楼に入るのだろうと不思議に思っていると、２階の会議室や３階の芸術の授業に使われているスペースに案内された。コロナ禍中はどちらの使用も控えられていたのかもしれないが、私は留学当初はそれらのスペースの存在をつゆ知らず過ごしていた。３階に飾られた先生と生徒たちによる水墨画や油絵からは絵に対する熱意が伝わって来て、私自身も芸術好きなので、留学中にみんなと何かしら描ける機会があったらなと少々残念に感じられた。

午後には元培寮に見学に向かった。留学中に住んでいた寮なので、実家に帰る感覚で向かったのだが、思いのほか印象を変えられた。コロナ禍中はオンライン授業が多かったり、生徒が校外に出かけることが少なくて寮にいたりしたためか、元培寮の地下室にはいつも人がたむろしていて、自習室はほとんどの場合学生でいっぱいで、ジムや音楽室も四六時中誰かが使っていた。人であふれている場所が苦手だったので、私は留学中に地下室に頻繁には訪れていなかったし、ジムなども利用したことがなかった（今思えばかなりもったいないことをしたかもしれない）。そのため、本日初めて元培寮の地下室の特色をきちんと目の当たりにした節がある。３Ｄ プリンターで作品を作れる部屋、新しくできたカラオケボックス（北京大生曰く、お隣の清華大学の新雅書院がカラオケボックスを設置したことを受けて、元培学院も負けじと設置したらしい）、古琴や箏を弾ける音楽室。実際に足を踏み入れてみて、改めて北京大学の学生がオールラウンドに成長できる環境と、北京大学の財力に感心した。恐らく今回の元培寮ツアーがなかったら、私の元培寮への印象は、「寝泊まりできて、地下室がすごいらしいところ」にとどまっていたので、元培寮をより包括的な視点で知ることができる機会を得られたことを嬉しく思う。

自由時間を使って西門に行った。この門は北京大学の門の中で最も華やかな見た目をしているという。留学当時、留学生の私がキャンパスの外に出るには事前に申請書を提出しなくてはならず、たまたま北京大生の友人と西門に寄ったときは友人だけが校門を出て、内側に残された私と西門の写真を取ってくれた。人が小さく写った写真となったほか、そのときは夜で仕上がりが暗めとなってしまった。そのうち申請書を提出して構外に出て西門と写真を取ろうと思っていたら、ゼロコロナ政策が厳しくなった関係で、それはかなわずに日本に戻る運びとなってしまった。だから今回の北京大学訪問は２年越しに願いをかなえる絶好のチャンスとなった。西門から外に出て、初めて自分の目で外から西門を眺めた。朱

色の柱に紺色と金の「北京大学」の銘板が映える。中国の最高学府としての歴史と気品を感じられる雰囲気を醸し出している。それを背景に写真を撮り、２年前の写真と見比べる。暗闇の中での西門と自分、青空の元で映える西門と自分。コロナ禍の抑圧的な環境を乗り越え、平穏で明るい生活にもどったことが心にしみた。

EAA との研修を通して、北京大学への印象ががらりと変わった。記憶の中の北京大学は、灰色がかかったものだ。それはおそらく、ゼロコロナ政策に従って厳しい規制をかけており、学生たちの授業や日常生活がままならなく、私自身が抑鬱な状態だったからだろう。今回の研修はその記憶に色を塗ってくれた。コロナ禍後の生命力に満ち溢れたキャンパスでは、再び当たり前の日常生活が始まった。

ぜひまたの機会に、北京大学という旧友に会いに戻ろう。